

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26244052

研究課題名(和文) 東アジア 日常学としての民俗学 の構築に向けて：日中韓と独自の研究協業網の形成

研究課題名(英文) Toward the Construction of "Folkloristics as Everydayness Studies" in East Asia

研究代表者

岩本 通弥 (IWAMOTO, Michiya)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：60192506

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 28,000,000円

研究成果の概要(和文)：日中韓の東アジアの民俗学が、もう一方の極に位置するドイツ民俗学の、市民運動的实践との協働性や、その鍵概念である「日常」を、いかにして包摂できるか、各国の異なる蓄積や方法を組み合わせることで、共創的にこれを検討した。口承研究に特化してきた中国では、生活世界や日常実践に焦点を当てる研究に強みを発揮するのに対し、「普通の人びと」の生活財を悉皆調査で記録化する韓国では、そこに暮らし向きを読み解く生活財生態学が盛んである。いずれ東アジアにおいても、地域分権的な市民本位の文化政策や住民主体のガバナビリティを築く「社会-文化」概念の受容が、喫緊の課題となることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research considered whether the East Asian folkloristics of Japan, China and Korea can collaborate with the civic movement practices of German folkloristics (Volkskunde), as well as examine the extent to which the key concept of the everyday (Alltag) could be embraced. In combining the differing stores of knowledge and methods of each country, we sought to examine this co-creatively. Unlike China, which has specialized in research on the oral tradition, and has demonstrated its strength in research on the world of day-to-day life and practice, Korean folkloristics has provided exhaustive surveys of the belongings of ordinary people in studying their circumstances through the study of an ecology of living goods. We have shown that in East Asia, the acceptance of the concept of socio-culture (Soziokultur) in building a citizen oriented decentralized regional cultural policy and resident governance is a critical issue.

研究分野：民俗学

キーワード：日常 生活世界 生活改善 生活変化 世相史 文化実践 暮らし向き研究 生活財生態学

1. 研究開始当初の背景

2003年に開催された第32回UNESCO総会で、無形文化遺産の保護に関する条約(以下、ICH条約)が採択されると、日本、中国、韓国では、リスト登載のための調査に、多くの民俗学者が動員された。衰退する地方や少数民族居住地区の地域おこしのため、ローカルな民俗文化を審美的に価値づけ、観光資源として流用できる「権威付けの装置」の役目を強いられ、民俗学はその有り方を基底から揺さぶられ続けた。いずれその遺産ブームは衰微しようが、それが消え去った時、民俗学それ自体も消滅してしまうのではないかと、強い危機感を共有化した日中韓の民俗学者が集い、相互に様々な国際討議を始める中、誰もが注目したのが、現代ドイツ民俗学の先端的な研究枠組であった。東アジア民俗学の共通課題を向けて協働したのが、本研究の背景となった。

2. 研究の目的

(1) ICH条約の成立により、その規定や制度に平準化されることで変質の激化した東アジアの民俗学が、もう一方の極に位置するドイツ民俗学の、市民運動的实践との協働性や、その鍵概念である「日常」を、いかにして包摂できるか、日中韓で各々特性の異なる方法や蓄積を組み合わせ、協業することで、新たな展望を拓くことを目的とした。

(2) 観光資源化や国家ブランド化に「回収」される傾向の強い東アジアの学的状況に対し、ドイツをモデルに、リージョナルに分散する市民本位の文化政策や住民主体のガバナビリティを築く「社会-文化」概念など、いずこの民俗学にも本来的に内在する、ソフト・レジスタンス的な市民実践や生活改善という「野」の学問的意義を再創造し、国際的な「多文化共生」の研究協業網を構築する。

3. 研究の方法

(1) ドイツ民俗学の「日常」概念を受容するため、日中韓の民俗学の理論的「地ならし」を行う必要から、本科学研究会が実質、主催した国際シンポジウムを合計4回開催した。

(2) 同様に、「日常」概念の導入と、日中韓の民俗学の理論的「地ならし」を行う必要から、日中韓3カ国語同時掲載の研究雑誌『日常と文化』を1号~5号まで刊行した。

(3) これらの理論的「地ならし」を普及・促進させるため、東京大学のWEB-PARK上に、ホームページを開設して、広報に務めた。

(4) 成城大学を拠点に同大学田中宣一名誉教授が蒐集してきた生活改善運動に関する資料を中心に、それを生活変化に読み解くための資料に変換し、データベース化した。国分寺市ほか市町村別に7630項目を入力した。

(5) ドイツ民俗学の現状を摂取するため、メンバーの多くが複数回、ドイツにおける現地調査を重ねたほか、2016年度にはDeutsche Gesellschaft fuer Volkskunde / Folklore Society of Japan Joint Symposium "Persp-

ectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany"に、6名を派遣して、研究交流を深化させた。

4. 研究成果

(1) 初年度の一歩の成果は、2014年10月4日に開催した国際シンポジウム「当たり前を問う! 日中韓・高層集合住宅の暮らし方とその生活世界」である。東アジア3カ国の生活は、都市化や産業化によって平準化し、一見、皆同じような暮らしを送っているかのように見えてしまう。だが、それはそこに暮らす人びとのヴァナキュラー(日常疎通的)な生活実践の結果だといえる。人びとは日常の暮らしの中で多様な工夫を凝らし、自分だけの居場所を築いている。集合住宅はまさにモダンで均質な暮らしを生み出す既成の空間であるものの、ひとつ一つの部屋には、それぞれの生きられた経験が埋め込まれている。日中韓の集合住宅を比較すると、文化ごとの住まい方の違いも潜在するが、文化と交渉しつつ個人の創造性が発揮されている有り様を、ヴァナキュラーに把握する、民俗学の特性を生かすべきことが、改めて確認された。

(2) 2015年度の最大の実績は、2015年10月10日関西学院大学で行われた日本民俗学会第67回年会の、国際シンポジウム「世界のなかの民俗学」においてドイツ・ゲティンゲン大学からレギーナ・ベンディクス教授を招聘し、「過去の大志と現在の必要 変容する政体における民俗学」(英語)の基調講演を実現したことである。ベンディクス教授は世界各地の民俗学の最新動向を紹介した、*A Companion to Folklore*, 2012, Wiley-Blackwellの編者として著名な碩学で、聴衆が中韓からも集まるほど、その講演は東アジア民俗学に有益なる刺激を与えた。同シンポジウムには米国インディアナ大学のマイケル・フォスター教授らも登壇したが、ベンディクス教授は引き続き、10月13日の国立民族学博物館で開催された、国際フォーラム「文化遺産レジーム」でも基調講演をされ、現代ドイツ民俗学の最先端の研究が広く紹介された。

(3) 3年目の2016年には、北京大学において9月4日・5日の2日にわたり、日中韓の国際シンポジウム「現代社会の日常を問うメディアと日常」を開催し、中国においても民俗学の日常研究の可能性を問い掛けた。焦点はマス・メディアと携帯電話の二つに分れたが、聴衆は300名以上参集した。これと関連して、2017年2月18日には、理論民俗学会との共催で、国立台中教育大学の林茂賢副教授と新生医護管理専門学校の黄麗雲助理教授を招聘し、「台湾民俗学の現状と可能性」を開催した。こうした活動を通じて、東アジア民俗学におけるプラットフォーム作りという当初目標はほぼ達成しつつあるといえる。

(4) 同じ3年目の2016年10月28日・29日には、日本民俗学会とドイツ民俗学会の共同事業として立ち上がった、第1回日独研究フ

オーラム「現代社会と民俗学」(ミュンヘン大学で開催)に、研究分担者3名、連携研究者1名、研究協力者2名を派遣し、うち3名が口頭発表を行った。日独民俗学の学术交流は、前科研究以来の課題であり、今後は2年置きに両国交替で国際フォーラムを開催することとなった。第1回目の内容は、2018年3月ドイツで Johannes Moser 編 *Themen und Tendenzen der deutschen und japanischen Volkskunde im Austausch* として刊行された。

(5) 2017年の最終年度には、総括のため、日中韓3カ国を主体とする国際シンポジウム「何気ない日常/変わりゆく日常 なぜ考え、いかに把握し、どう記録するのか」を、2017年7月8日・9日の二日にわたって、成城大学を会場に開催した。東アジア3カ国のほか、ドイツからも研究者が来日し、国際色豊かなものになった。シンポジウムは三部構成で、第部を「生活」対象/生活変化と生活改善、第部を「日常」概念/それぞれの受容、第部を「世相」方法/変化する日常をどう把握・記録するかに分けた。

(6) このうち第部は、東アジアの生活改善運動の相互比較と言えるもので、1920~30年代にほぼ同時発生的に胚胎し、戦後それぞれに展開した生活改善運動/新生活運動を、「普通の人びと」による内発的な運動とみなし、高度経済成長の土台を築いたその運動と戦後の日常史的な生活変化を、同質性と異質性を視野に入れつつ相対化した。戦後それぞれの高度経済成長の基礎において、「普通の人びと」がいかに日常実践していったかを基軸に、日中韓が協調して上述の課題を主題化した。1920~30年代は東アジアの各国で民俗学が形成された時期でもあり、両者がパラレルな関係にあったことも浮かび上がった。

(7) 東アジア各国の「日常」概念は、ドイツ民俗学の影響があるものの、各国民俗学の動向を反映し、一律に理解できないことが露わになった。特に中国民俗学における日常は、ミシェル・ド・セルトー流の日常実践を方法的に摂取しているが、中国問題と呼ばれる社会主義で一党独裁の中での文化的実践であることに注意する必要がある。一方、韓国の日常研究は、物質文化研究を中核としたサルリムサリ(暮らし向き)研究=生活財生態学が一つの特徴であることが明確になった。

(8) 以上のような日中韓の共創によって、明らかになったのは、ドイツ民俗学における市民運動的実践や、その鍵概念である「日常」を受容するプロセスにおいて、それぞれの学史的な研究蓄積の相違によって、同じ日常研究でも日中韓の民俗学では相互に異質な特徴を有していることであった。説話研究に特化して発展してきた中国では、生活世界研究に厚い蓄積があるとともに、アーヴィン・ゴフマンやセルトー的な日常実践に焦点を当てるのに対し、韓国では当たり前前の現代の日常を、モノの記録集積から「普通の人びと」の生き方を捉える暮らし向き研究に特筆す

べき実績があることがわかった。セルトーの日常を即時的日常と呼ぶなら、日本のそれはタイムスパンの長い、柳田國男流の世相史的日常と呼べる、生活文化の体系的変化をプロセスとして捉える点に研究の強みを持っている。一方、社会-文化という概念や思想、社会システムは、未だ受容の基盤が整っておらず、今後の課題として、これらを創発的に活かし合う日中韓の協業が求められよう。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計128件)

__岩本通弥、生活・日常・世相 変化を捉えるために、日常と文化、5号、2018、1-8

__周星、百年の不体裁 現代中国のトイレ革命、日常と文化、5号、2018、49-62

__田村和彦、「非遺」時代的自文化研究 議論固化的“遺産”概念与面向未来的開放的“生”的記録、Senri Ethnological Studies 97、2018、査読有、187-197

__門田岳久、フォト・エリシテーションを用いた教育と社会実践 宮本常一写真を通じた佐渡の開発/観光史研究から、立教大学観光学部紀要、3、2018、査読無、47-55

__及川祥平、信仰体験談にみる生駒聖天信仰「歓喜」収録記事を素材として、松崎憲三ほか編『靈山信仰の地域的展開 死者供養の山と都市近郊の靈山』岩田書院、2018、47-68

__山泰幸、物の哀れをしるより外なし 環境民俗学の認識論、環境社会学、23、2017、査読有、53-66

__Xing ZHIQIU, Flok Belidif and Its Legitimization in China, Western Folklore, 76(2), 2017, 査読有, 151-165

__Takanori, SHIMAMURA, Folklore in the Midst of Social Change: The Perspectives and Methods of Japanese Folkloristics, Japanese Review of Cultural Anthropology, 2017, 査読有, 191-220

__岩本通弥、異化される「日常」としてのマスメディア―「男子置き去り事件」と「介護殺人/心中事件」のNEWS報道をめぐって、日常と文化、査読無、3号、2017、63-98

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/alltag/wp-content/uploads/2017/06/日本語版6.pdf>

__周星、情報機器(ケータイ)の普及と身近な生活革命、日常と文化、3号、2017、3-28

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/alltag/wp-content/uploads/2017/06/日本語版2.pdf>

__周星、生活革命与中国民俗学的方向、民俗研究、2017年第1期、査読有、2017、5-18

__法橋量、日独民俗学会共催国際シンポジウム報告、日本民俗学、289、2017、130-134

__田村和彦、メディアを取り込む日常生活分析のあり方について、日常と文化、3号、2017、査読無、29-42

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/alltag/wp-content/uploads/2017/06/日本語版3.pdf>

__門田岳久、聖地と儀礼の「消費」 沖縄・斎場御嶽をめぐる宗教/ツーリズムの現代

民俗学的研究、国立歴史民俗博物館研究報告、205号、2017、査読有、255 - 290

__門田岳久、「離島性」の克服 宮本常一と反転する開発思想、立教大学観光学部紀要、19号、2017、査読無、23 - 37

__岩本通弥、日本民俗学者岩本通弥教授訪談録、民俗研究、2016年第5期、2016、査読有、21 - 26

__周星、民俗主義・学科反思与民俗学的実践性、民俗研究、2016年第3期、2016、査読有、5 - 14

__大月敏雄、団地再生の夜明け 再生し続ける団地を目指して、都市計画、65号、査読無、2016、72 - 75

__島村恭則、民俗学の研究動向と方言研究との接点、方言の研究、2号、2016、査読有、151 - 163

__外村大、やさしい人びとの平和な国？日本と日本人、武内進・西崎文字編『紛争・対立・暴力 - 世界の地域から考える』2016、査読無、157 - 174

②①森明子、そして、私たちは愛に帰る ドイツとトルコを結ぶ第二世代の物語、小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ』、2016、査読無、23 - 30

②②篠原聡子、さまざまな人の記憶や生活を繋ぐ地域の核としての赤羽台団地、新建築 2016年4月別冊：都市を再生させる、91巻7号、2016、査読無、86 - 89

②③桑山敬己、日本の自画像の系譜 欧米的個人主 vs. 日本的集団主義、Culture, Energy, and Life、114号、2016、36 - 43

②④門田岳久、聖地観光の空間的構築 沖縄斎場御嶽の管理技法と「聖地らしさ」の生成をめくって、観光学評論、4巻2号、査読有、2016、161 - 175

②⑤島村恭則、シンポジウム報告・日本民俗学会 2014 国際シンポジウム『「当たり前」を問う！ - 日中韓・高層集合住宅の暮らし方の変化とその生活世界』、日本民俗学、285号、2016、査読有、107 - 114

②⑥島村恭則、複数形人類学とフォークロア研究、川田牧人編『二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先：グローバルでローカルで複数のフォークロア研究へ』SEIJO CGS WORKING PAPER、成城大学グローバル研究センター、12号、2016、査読無、1 - 15

②⑦小島孝夫、市町村合併後の地方自治体再創造にむけて 社会動態と地域社会のくらし、グローバル時代に見られる地域社会 文化創造の様相、成城大学グローバル研究センター、2016、査読無、1 - 37

②⑧門田岳久、文化遺産の保護と活用を通じたソーシャルインクルージョン - 沖縄県南城市における3年間の調査実習から、交流文化、16号、2016、査読無、28 - 33

②⑨門田岳久、博物館と住民参加 - 佐渡國小木民俗博物館にみる地域とのかかわり方、交流文化、16号、2016、査読無、34 - 41

③⑩岩本通弥、無形遺産条約と日韓の文化財保

護法 - その対応の相違、鈴木正宗編『アジアの文化遺産 過去・現在・未来』慶應義塾大学出版会、2015、査読無、387 - 414

③⑪岩本通弥・篠原聡子・大月敏雄・黒石いずみ・栢木まどか・勝矢武之ほか、民俗学における「普通の暮らし」：岩本通弥・前日本民俗学会会長に聞く、日本建築学会『建築雑誌』、130巻1670、2015、査読無、10 - 15

③⑫大月敏雄、すまいのまちなみネットワーク：第7回総会「住み替え」と集住環境の持続性：3、住宅生産振興財団編『家とまちなみ』、第34巻第2号、2015、査読無、40 - 50

③⑬篠原聡子、SIIARE HOUSE: A LIVING WAY OUT OF THE ISOLATION、城市建築・URBANISM AND ARCHITECTURE (中国) 2016、査読無、20 - 23

③⑭外村大、戦後日本政治における植民地支配の歴史認識、神奈川大学評論、81号、2015、査読無、82 - 90

③⑮山泰幸、災害に備える村の事前復興の試み 徳島県西部中山間地の事例から、年報村落社会研究、51、2015、査読有、150 - 182

③⑯岩本通弥、「当たり前」と「生活疑問」と「日常」、日常と文化、1、2015、査読無、1 - 14

③⑰岩本通弥、なぜユニフォームを着るのか？ 衣服で演じる一体感、福田アジオ編『知って役立つ民俗学 現代社会への40の扉』ミネルヴァ書房、2015、査読無、118 - 123

③⑱周星、平民・生活・文学 周作人の民俗学、日常と文化、1号、査読無、2015、15 - 34 <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/alltag/wp-content/uploads/2016/05/日2-周星.pdf>

③⑲周星、本質主義的漢服言説と建構主義的文化実践、民俗研究、2014年第3期、2015、査読有、130 - 145

④⑩篠原聡子、東京のマンションの展開と暮らし、日常と文化、1、2015、査読無、46 - 55 <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/alltag/wp-content/uploads/2016/05/日4-篠原.pdf>

④⑪大月敏雄、住み方調査と「建築計画学」、日常と文化、1号、2015、査読無、80 - 84、<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/alltag/wp-content/uploads/2016/05/日7-大月.pdf>

④⑫重信幸彦、世相史の可能性、日常と文化、1号、2015、査読無、109 - 112、<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/alltag/wp-content/uploads/2016/05/日11-重信.pdf>

④⑬重信幸彦、民俗学の中での「世間/話」『明治大正史 世相篇』(1931)から、日本民俗学、281号、2015、査読有、47 - 67

④⑭小島孝夫、「民具」から何を学ぶのか 潜水メガネからみた海女の生活、後藤明・濱田琢司編『人類学研究所研究論集』、2号南山大学人類学研究所、2015、査読有、40 - 55

④⑮田村和彦、近現代中国における「正しい」葬儀の形成と揺らぎ 二つの「聖なる天蓋」とその後の展開、中国21(愛知大学現代中国学会編) 41号、2014、査読無、175 - 202

④⑯田村和彦、民衆の葬儀と国家 - 近現代中国における人々の葬儀、国立歴史民俗博物館、山田慎也、鈴木岩弓(編)『変容する死の文

化：現代東アジアの葬送と墓制』東京大学出版会、2014、査読無、173 - 200

④⑦田村和彦、中国における火葬装置、技術の普及と労働現場の人類学：新たな技術を受容し、環境を再構成する、韓敏（編）『中国社会における文化変容の諸相：グローバル化の視点から』（国立民族学博物館論集 3）、風響社、2015、査読無、51 - 76

④⑧外村大、植民地期における在日朝鮮人の文化活動、植民地文化研究、13号、2014、査読有、2 - 10

④⑨島村恭則、フォークロア研究とは何か、日本民俗学、278号、2014、査読有、1 - 34

〔学会発表〕(計80件)

岩本通弥、日本の生活改善運動と民俗学、第38次実践民俗学会学術大会(ソウル)2018

周星、汚穢/潔淨観念與当代中国的厕所革命、北京師範大学社会学院人類学與民俗学系講演会、2017

島村恭則、日本“都市民俗学”的興衰与当代轉型、「城市化過程与文化多様性」学術研討会、2017

島村恭則、何謂民俗学(Vernacular Studies)?、上海民間文芸家協会民俗理論聚会、2017

山泰幸、文化が創り出す成熟した日韓関係、韓国日本學會第92回國際學術大會、2016、

門田岳久、公共聖地論 沖縄南部聖城における空間管理の技術と秩序生成をめぐる、観光学術学会第3回研究集会、2016

周星、生活革命・ノスタルジアと中国民俗学、日本民俗学会・中国民俗学共催の國際シンポジウム(招待講演)(國際学会)、2016

田村和彦、科学技術世界のなかの生活文化 - 日中民俗学の狭間で考える、日本民俗学会國際シンポジウム「民俗から考える東アジア世界の現在」(國際学会)、2016

KADOTA, Takehisa, Spiritual Tourists and Secular Pilgrims: An intersection of Religion and Tourism in a World Heritage Site in Japan, Deutsche Gesellschaft fuer Volkskunde / Folklore Society of Japan Joint Symposium “Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany”(國際学会)、2016、

SHIMAMURA, Takanori, What is “Minzokugaku”? An Introduction to Japanese Folkloristics. Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany, 同上(國際学会)、2016

島村恭則、シンポジウム総括「『落日』を超えて 民俗学の将来像」、京都民俗学会シンポジウム「『落日の中の日本民俗学』を超えて 京都で考える民俗学のかたち」、2016、

山泰幸、活用文化遺産の社区营造 以日本為例、東北亜民族文化研究会(招待)、2016

森明子、ケア概念の可能性 - 社会的なものの民族誌のために、日本文化人類学会第50回研究大会、2016

門田岳久、沖縄・斎場御嶽をめぐる開発思

想と住民参加、日本文化人類学会第50回研究大会、2016

岩本通弥、日本の民俗学 教養教育としての概論の課題、韓国・比較民俗学会、2015

桑山敬己, Re-reading John Embree, Suye Mura(1939): What Do Classics Tell Us Today?, East Asian Anthropological Association、2015

Mori, Akiko, “Introduction ‘Thinking about Cultural Heritage Regimes’” The International Forum ‘Thinking about Cultural Heritage Regimes. A Discussion with Prof. Regina Bendix’, 2015

森明子、移民が語る都市空間、大阪市立大学平成27年度國際學術シンポジウム『EU諸地域における環境・生活圏・都市文化接触のコンテクストとコンフリクト』、2015

島村恭則、民俗学と方言研究との接点、日本方言研究会(招待講演)(國際学会)、2015、

Iwamoto Michiya, About the Folklore Society of Japan(FSJ) in Invited Panel; Reinventing folkloristics as a study of modernity: Japanese perspectives, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress、2014、

②① Kuwayama Takami, The basic characteristics of Japanese folkloristics Invited Panel; Reinventing folkloristics as a study of modernity: Japanese perspectives, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress、2014

②② Shimamura Takanori, Folkloristics as the vernacular anthropology: activities of the society for researching deity and forest of the Miyako Island, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress、2014

②③ 周星、高度的日常及其危機 日本的塵芥分類及回収体系、中央民族大学招待講演、2014

②④ 周星、国家與民俗 現代中国的文化政策、上海華東師範大学民俗学研究所、2014

②⑤ 周星、都市民俗学與都市的日常生活研究 兼論「高度的日常及其危機」、上海華東師範大学(招待講演)、2014

②⑥ Zhou Xing, Steamed bread(Mantou): From a Ritual Offering to an Intangible Cultural Heritage in North China, Western States Folklore Society 2015 Annual Meeting、2015

②⑦ 田村和彦、「生活方式」の人類学再思考 以物質/空間/身体的日中研究為中心、北京大学人類学論壇(國際学会)、2014

②⑧ 田村和彦、物質生活の変化と生活 - 中国内陸部における家電・家具・トイレを中心に、国立民族学博物館國際シンポジウム『中国文化の持続と変化 - グローバル化の中の家族・民族・国家』(國際学会)、2014

②⑨ 島村恭則、ヴァナキュラー・トラディション・通時的リフレクション、日本民俗学会第66回年会、2014

③⑩ 島村恭則、複数形人類学(民俗学由来)へ：

Anthropologies with strong background in Folkloristics、現代民俗学会第 26 回研究会「二つのミンゾク学から世界民俗学」、2014
③門田岳久、「聖」を保全する - 沖縄・斎場御嶽の観光化と聖域管理の相克、国立民族学博物館機関研究「文化遺産の人類学 - グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」成果公開フォーラム「文化遺産の人類学」(招待講演) 2014

〔図書〕(計 19 件)

大月敏雄、岩波書店、町を住みこなす 超高齢社会の居場所づくり、2017、272

大月敏雄、王国社、住まいと町とコミュニティ、2017、220

山泰幸編、明石書店、在日コリアンの離散と生の諸相 表象とアイデンティティの間隙を縫って、2017、192

篠原聡子・日本女子大学篠原聡子研究室編、彰国社、シェアハウス図鑑、2017、128

山泰幸編、明石書店、在日コリアンの離散と生の諸相—表象とアイデンティティの間隙を縫って、2017、192

及川祥平、勉誠出版、偉人崇拜の民俗学、2017、478

設楽博己・工藤雄一郎・松田睦彦共編、新泉社、柳田國男と考古学 - なぜ柳田は考古資料を収集したのか、2016、220

桑山敬己編、昭和堂、日本はどのように語られたか 海外の文化人類学的・民俗学的日本研究、2016、451

山泰幸、筑摩書房、だれが幸運をつかむのか 昔話に描かれた「贈与」の秘密、2015、175

小島孝夫編、明石書店、平成の大合併と地域社会のくらし 関係性の民俗学、2015、520

篠原聡子・竹内光子・橋本之克・星野雄、東洋経済新報社、他縁社会。2015、296

外村大・韓載香・羅京洙、緑蔭書房、資料メディアの中の在日朝鮮人、2015、523

重信幸彦・小池淳一編、岩田書院、歴博フォーラム：民俗展示の新構築 民俗表象の現在：博物館型研究統合の視座から、2015、187

門田岳久・室井康成編、森話社、人に向きあう民俗学、2014、267

〔その他〕ホームページ等

日常学としての民俗学

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/alltag/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩本 通弥 (IWAMOTO, Michiya)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：60192506

(2) 研究分担者

桑山 敬己 (KUWAYAMA, Takami)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50288057

周星 (ZHOU, Xin)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：00329591

小島 孝夫 (KOJIMA, Takao)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：60286903

森 明子 (MORI, Akiko)

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・教授

研究者番号：00202359

篠原 聡子 (SHINOHARA, Satoko)

日本女子大学・家政学部・教授

研究者番号：20307987

外村 大 (TONOMURA, Masaru)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40277801

大月 敏雄 (OOTSUKI, Toshio)

東京大学・大学院工学系研究科・教授

研究者番号：80282953

島村 恭則 (SHIMAMURA, Takanori)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：10311135

山 泰幸 (YAMA, Yoshiyuki)

関西学院大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：30388722

田村 和彦 (TAMURA, Kazuhiko)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：60412566

安藤 耕己 (ANDO, Kouki)

山形大学・地域教育学部・准教授

研究者番号：30375448

松田 睦彦 (MATSUDA, Mutsuhiko)

国立歴史民俗博物館・研究部・准教授

研究者番号：40554415

門田岳久 (KADOTA, Takehisa)

立教大学・観光学部・准教授

研究者番号：90633529

重信 幸彦 (SHIGENOBU, Yukihiko)

国立歴史民俗博物館・研究部・客員教授

研究者番号：70254612

(平成 28 年度より連携研究者)

加賀谷 真梨 (KAGAYA, Mari)

新潟大学・人文社会・教育学系・准教授

研究者番号：50432042

(平成 28 年度より追加)

及川祥平 (OIKAWA, Shohei)

川村学園女子大学・文学部・講師

研究者番号：30780308

(平成 28 年度より追加)

(3) 連携研究者

法橋 量 (HOKKYO, Haku)

慶應義塾大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：40634192

金 賢貞 (KIM, Hyeon-jeong)

亜細亜大学・国際関係学部・講師

研究者番号：20638853